



誌季
能古博物館だより

能古島北浦採石場跡 小川 誠氏撮影

地質博物館・能古島(1)

能古会会員

小川 誠

能古島の採石場

昔、能古島の北西部の邯鄲という所では、黒田藩の石切場があったと言われている。切り出した石は干潮時に船底にくくり付け、満潮を待って運んでいたらしい。また、昭和30年頃までは、島の東と西の2か所に採石場があったと言われており、その跡は古い地図に載っている。なお、地図にはないが、戦時中に内務省が博多港の堤防の根石とするため、直轄で掘ったという採石場が無線中継所の下にある。そこへの道は雑木が茂っていて、やっとたどり着いた所は、

採掘跡の断崖絶壁が眼下に広がっていた。当時、切り出した石は自転巻きで海岸の棧橋まで運んでいた。その方法は、採石を積んだトロッコが自重で坂道を下り、同時に、つるべ式に繋いだロープで空のトロッコを引き上げていたようだ。

能古島の玄武岩

能古島では何処に行っても玄武

岩が目につく。玄武岩は硬いが加工し易いので石材として良く利用される。また、能古島の玄武岩は柱状節理が発達し、適当な大きさで採掘されるので好都合である。邯鄲の石切場もこのような柱状節理が発達した玄武岩であったと思われる。

柱状節理

火山活動が盛んになり、地上を流れた玄武岩の溶岩は、上下両面から冷却されて溶岩の体積は収縮する。その際、冷却面に垂直に亀裂ができる。この亀裂は規則正しくできるので、それを柱状節理と呼んでいる。六角柱を並べたような景観を作ることが多い。この付近では芥屋の大門や呼子の七つ釜が有名である。玄武岩の名は兵庫県の玄武洞に由来するが、六角形の節理が亀の甲羅の模様に見えることから、四神の一つ「玄武」の亀にあやかり、亀岩、すなわち、玄武岩と名付けたと言われる。

地質博物館・能古島

能古島は玄武岩以外にも、いろいろな岩石が分布し、それらは多様な地質構造を作っている。島全体がそのまま地質博物館であると言っても過言ではない。九州大学理学部地質学科は、永くここを地質学の実習地としていた。そして地質学科の同窓会を「能古会」という。卒業生は同窓会を重ねるごとに、能古への郷愁が募り、友情を深めている。また、福岡大学でも、地学の実習地として利用している。そういうわけで、能古の人やこの島を訪れた人たちは、能古島の地質にも目を留めて欲しいと思う。では、島の基盤をなす3億年岩石にご案内しよう。

黒雲母片岩

能古島で最も古い岩石は三郡変成岩で、これを貫いて花崗閃緑岩がある。これらの上に古第三紀層が堆積し、さらにその上を玄武岩が覆っている。すなわち、三郡変成岩は能古島の基盤である。

地質時代で言えば石炭紀以前に海底に堆積した砂岩や頁岩が、石炭紀後期、約3億年前にその変質

が完了して三郡変成岩となった。能古郵便局から東北へ約300mの海岸に、黒雲母片岩が顔を覗かせている。変成岩に特有の縞状構造をなし、黒い縞は黒雲母、白い縞は石英・斜長石が集まっている。これらの鉱物が一定方向に並んでいる面（片理面）の走向はほぼ東西、傾斜は南に急傾斜している。

これは、三郡変成岩が約1億年前に花崗閃緑岩の貫入を受け高温岩体に接して熱変質を受け、ホルンフェルス化して（角岩化…陶磁器が窯で焼いて固くなるように）極硬岩となり、変成鉱物の黒雲母を生じたのである。

ゆえに、黒雲母片岩の生成した時代は花崗閃緑岩の貫入時期、1億年前であるが、そもそも、三郡変成岩の生成は3億年ということだ。

この岩の上で足を高く踏み鳴らし、3億年岩石の生成を思い浮かべてみよう。地上の人間の悩みなどはちっぽけなことだと分かるだろう。

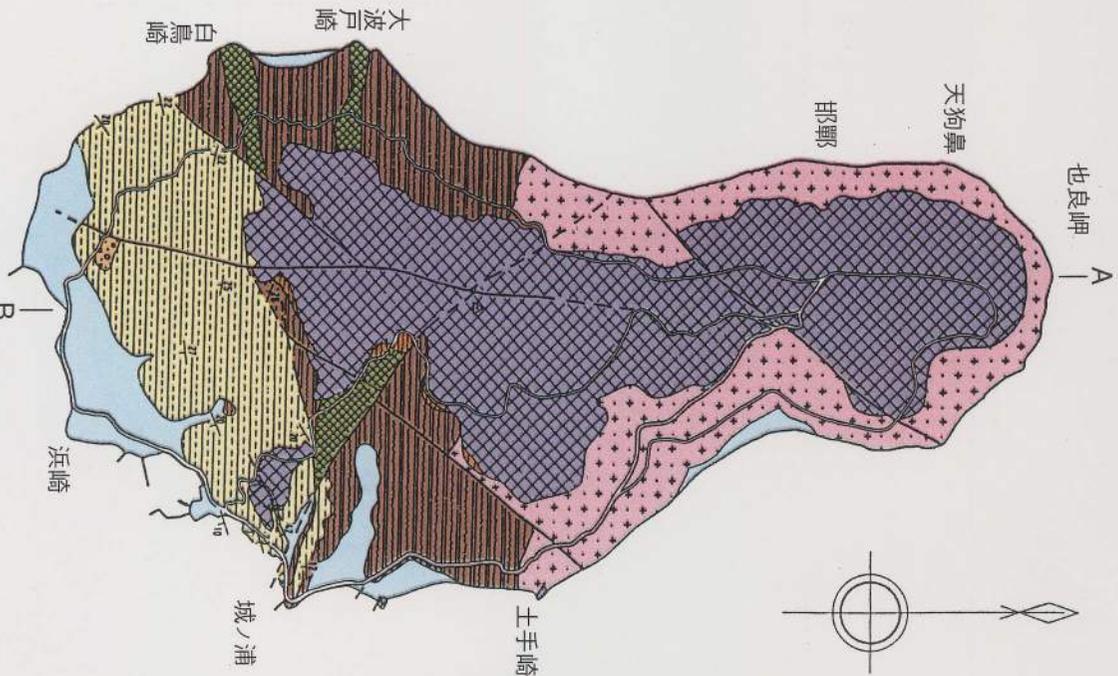
（次号に続く）



能古島北浦海岸に露出している黒雲母片岩

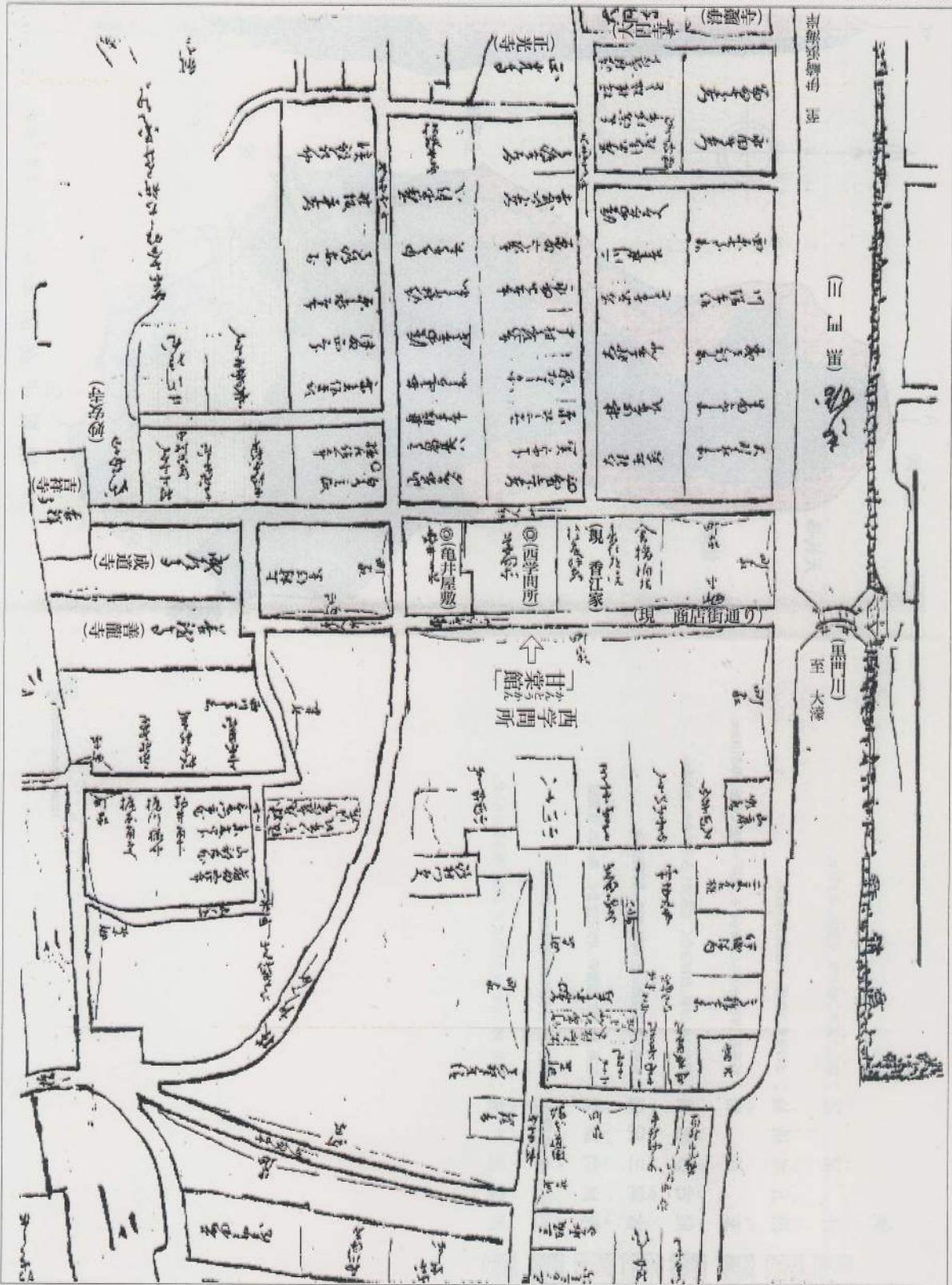
小川 誠氏撮影

| 凡 | 例 |
|---|---|
| | 沖積層 : 現在の海岸の砂や礫。未固結。厚さ数m。 |
| | 段丘堆積物 : 昔の海岸の砂礫。未固結。厚さ数m。 |
| | 玄武岩 : 斜長石・輝石、かんらん石からなる。暗灰〜黒色で緻密。厚さ100m。 |
| | 能古砂礫層 : 礫まじりの砂岩、固結度低く、玄武岩の直下にある。厚さ数m。 |
| | 古第三紀層 : 古第三紀に堆積した。礫岩、砂岩、凝灰質泥岩。 |
| | 花崗閃緑岩 : 石英、斜長石、黒雲母、角閃石を含む。黒く、硬い花崗岩。 |
| | 変斑れい岩(角閃岩) : 斜長石と角閃石を含む変成岩。緑の岩。 |
| | 黒雲母片岩 : 頁岩、粘板岩からできた変成岩。黒色で絹縞様のある岩。 |



地質断面図

地質平面図 (唐木田、1965を一部修正簡略化)



(参考付図) 福岡城下「唐人町、亀井屋敷、西学問所」絵図
 (原図 福岡県立図書館収蔵)

(註) 本図の作製は、右に繪井水亭問所の記載から、天明四(一七八)年以後で寛政十一(一九)年の大火による問所焼失までの期間が想定される。図中の寺號は現在寺町位置に於て氏名記事によつても同位置で当手孫の現在が瞭解される。よつて以上の推定は確實を証することが出来る。「能古博物館だより」33号(平成9年7月31日)より

亀井家学を支えた女たち(2)

昭陽妻 イチ 中

早 船 正 夫

(福岡地方史研究会会員)

◆南冥の失脚は結婚三年前

能 古 博 物 館 だ よ り

昭陽妻イチが嫁いだ当時の亀井家は、逆風吹き荒れる時期にあった。その三年前の寛政四年(一七九二)父南冥は黒田藩の西学問所甘棠館の主宰(総受持兼教授)を退任処分となる。さらに終身禁足を命ぜられ、自邸内の一室を独楽園と名付けて、そこにこもる。その時昭陽は二十歳。家督相続を認められ、西学訓導に任せられたものの、十五人扶持を給せられたにとどまる。それまでの本禄は百五十石であり、なんと四分の一に減額したことになる。南冥の後任は、その高弟江上荅洲となつたが、師としての魅力は南冥に及ぶべくもなく、なにより西学に対する藩の方針が明らかになつたため、甘棠館の諸生は離散、甘棠館の隣地にある亀井塾の在塾生も僅少となつていた。

◆イチの家庭内の仕事

イチは、こうした時期に亀井家の人

の遊学者や筑前各地の入門生で甘棠館に入学を許されない者等を塾で教育する。そして朝飯。続いて同一敷地内にある甘棠館に出

仕。これは藩の勤務であり午前の講義を終え帰宅。昼飯後再び甘棠館での講義と教務。それから塾で塾生への講義。会説・輪講は夜に行う。甘棠館生や塾生の文書の添削は深夜になつた。

イチは夫の身の回り、食事の世話について細かく目をくばらなくてはならない。祠堂の孔子聖像や先祖の尊體の清浄、先祖の祥月命日等の祀りは、儒家の教義として厳格に行い、御寺や御墓のお参りも欠かせなかった。またイチには南冥とその妻トミ(脇山氏)に、嫁として仕える務めもあった。南冥は、

となつた。新婚当座の夫昭陽の生活は次のようなものである。昭陽は早朝に起床、洗面、祠堂礼拝それから塾での講義。他国

詩才に優れたスケールの大きな木学者であることは勿論だが、他方では「儒侠」ともよばれる親分肌の人物でもあった。家庭人としては非常に個性の強い人であつたらう。大酒豪でもあり、酒の失敗も語られている。イチにとつて南冥は叔父君にあたるのが救いであるが、この名うての学者とウマがあうコツを会得していかなければならない。さらに昭陽には地元や他国の学者文人との交流や往来



江上荅洲肖像 尾形洞画

が多かつた。その来宅時の接待にも、イチは万全の心遣いに神経を費やすことになる。そして家塾の経営、塾生の面倒見こそ塾主の妻の重要事である。イチは育児、子

女の教育の始まる前に、これらの一つ一つをこなしていった。

◆二度の全焼

二度の実家振り返り住まい

寛政十年。イチの嫁入りから二年と三カ月が過ぎた頃、唐人町の町家の出火で、甘棠館と亀井家の建物は類焼し

た。南冥が永年かけて収集してきた書籍・文献・書画、それに南冥昭陽の著作物の殆どを焼失したことは、特に痛恨の極みであつたらう。

昭陽夫婦はイチの実家である姫浜の五島屋(早船)に避難した。昭陽は離れの自室を「閑戸堂」と称し、遠国からの塾生を主とした家塾を再開する。南冥夫婦は五島屋から約百米離れた、父聴因の旧宅「忘機亭」に落ちつく。ここは南冥の生家でもある。

イチは五島屋で長女「友」(後の少琴)を出産する。

一方黒田藩は南冥に追い打ちをかけるように、甘棠館の再建を許さず、西学問所の廃止を決定する。教職員は儒業職を停止し、全員を平士とした。昭陽も城代組平士に編入された。避難先の姫浜で、この知らせを聞いた亀井家の人々の悲痛な思いは察するにあまりある。

かくて、藩の儒業職は東学問所修猷館の所属員のみとなり、全国でも珍しい両藩学制度は十五年にして終焉となつた。

火災の翌年、昭陽は唐人町被災地跡に住居と塾舎の新築にこぎつけた。しかし数カ月にして再び類焼の憂き目にあう。またまた姫浜の五島屋に避難。この時イチは二女「敬」を出産する。

◆百道林に家塾を構え再出発

二度目の被災の翌年に、昭陽は百道林に土地を贖ない、家塾を新築する。二度目の被災で、流石に唐人町には嫌気がさしたのか。

唐津街道を西に向かい、樋井川を渡った大西(西新町の古名)がわの北側。東と北に松原を背負い、東を川に臨んだ一画。現在の福岡記念病院の南側といわれている。坪数は不詳。この好適地を亀井学の再出発地とするべく、「新地」と呼んだ。

昭陽は、このような激動の環境の中でも、『古序翼』を著述するなど、著作の手は緩めなかった。驚嘆すべき不屈の志である。

◆二度の新築と土地の購入の資金

ここで興味をひくのは、火災保険などないこの時代に、二度の新築と土地の購入の資金はどのようにしてきたのか、という点である。黒田藩の救済資金貸付金七十四両の外に百両の借入金のあることが、昭陽の門人への書簡に出ているが、百両の明細は不詳。南冥に学んだ医学生と塾の終了生の救援が大半をしめるが、掛け軸などの『書』や墓碑・記念碑等の撰書の御礼金ほもちろんのことさらには富裕な商家の貸

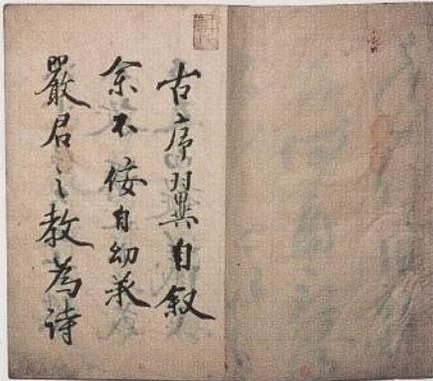
付金もあつたと思われる。

◆全国一流の学者にして

城内巡回の武士

百道林で再出発した昭陽であるが、城代組の一般武士としての公的勤めもあり、早朝の家塾での講義後に出仕、城内の警備や郡方の下役等を勤めあげ、帰宅後塾生の教育、夜は会談・輪講、そして添削。自己の研究も当然ある。昭陽の学名を慕って遠くから遊学している塾生の水準は高くもちろんこちとは許されない。昭陽は若年からの習慣で、どんな権門に呼ばれる時も、「ふところ」には書籍草稿をしのばせ、暇あれば読書勉学につとめたと言われている。

最初の火災以後の十年間に、昭陽の手になる著書をあげれば次のようになる。『古伝概』二巻『古序翼』二巻『字例述志』七巻『尚書考』三巻『歳文談』一巻



「古序翼」 亀井大年廿五才筆写本

その廃校後は昭陽と同様、一般武士に役替えを命ぜられた。しかし「自分は儒者として仕えたので武芸の心得はない。退身したい。」と申し出た。が、許されず、それならば自分の子を本当の武士にする

と、学問を捨てさせ武芸を習わしめて一般武士にし、自身は隠居して儒学に専念した。昭陽は荅洲と同じ道を選ばずあえて一般武士と儒学者の両道を進んだ。趣味でやる儒学とは違う、一流の学者に伍していく学問の世界と平武士との二股生活である。それは、昭陽が二十五歳という若さだから選べたともいえよう。家塾を営むためには資金が必要であり、十五人

『五子文評』三巻『歳文談』二巻『蛾子』一卷である。いずれも門人により筆記され、教科書となる。

◆なぜ塾主に専念しなかったのか。

南冥の高弟、江上荅洲は南冥の後任として甘棠館の主宰に任せられたが、

扶持とはいえ、その定収入は亀井家にとつて貴重な財源と言える。また藩士の身分を子孫のためにも失いたくなかった、というのも理由の一つであったかもしれない。

しかし、父南冥の学風と水準を堅く守り、亀井家学を築き上げる覚悟と執念がその根底にあつたからこそ、両立を選択できた。このことは、昭陽生涯の実践の跡からもはつきりと実証される。

◆秋月藩の刊行による

南冥著「論語語由」

百道林移転から五年、秋月藩主黒田長舒の知遇を得、父南冥の畢生の大作「論語語由」が秋月藩の手で刊行されることになった。親藩の黒田藩からは冷遇されてきた南冥であったが、親藩が二代続きの幼年藩主であったため、秋月藩主・黒田長舒が幕府から後見を命ぜられていたこともあり実現したようなものである。

昭陽は秋月藩主の参勤交代の行列に加わることを許され、江戸で「論語語由」の開板(版木の彫り込み)の指示校正に従事する。この時の六カ月にわたる旅の記録は紀行文「東遊賦」として遺されている。

能古博物館だより

◆ 烽山番役に就役

このような支藩主すなわち秋月藩主の厚遇は、親藩に於ける昭陽の立場をよくしたかといえはそうとは言えない。声望に対する妬みもあるろう。冷遇はなお続く。

帰国後翌々年「烽山番」に就役。辺境の山奥に十日勤務し十日自宅待機が勤務内容。

昭陽は耐えに耐え、勤務と家塾の経営の両立を果たす。彼の尽力の甲斐あつて塾生もしいに増加するのである。

さて、この間、妻イチのこと
は昭陽の記録等には出てこない。また当時の婦人の地位からして、表面立って積極的な動きをして
いるわけではなさそうである。しかし、昭陽の上述のような行動や選択の陰には、イチの懸命な支えの存在を感じざるを得ない。

(次号に続く)

【参考文献】

○大備亀井昭陽伝

(一)より(十七)

庄野寿人

○峇洲の人と書と

(能古博物館だより所載)

安陪光正

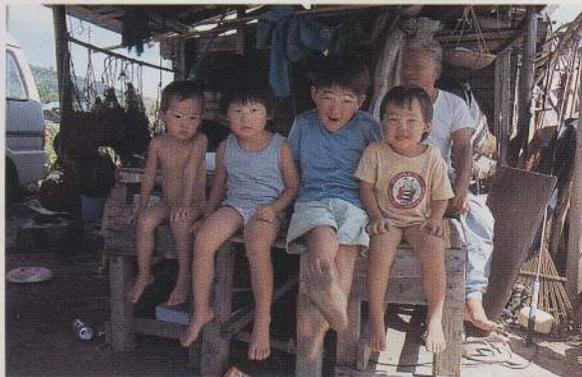
第三回能古の風フォトコンクール

— 入賞者決定!! —

グランプリ賞

「風の子」

渡邊 健氏



特別賞

「龍宮城」

小川 誠氏



今年もたくさんの御応募をいただき、有難うございました。毎年、回を重ねるごとに応募写真もふえてゆき、おかげ様で今年は88枚もの作品が集まりました。本当に有難うございます。

この限られた小さな島の中だけで、このようにいろいろな写真を撮ることができるのかと毎年のことながら、あらためて驚いております。何時間もじっと待ち続けて1度きりのシャッターチャンスの話・雨の日も雪の日も何度もくり返し島へ足を運びひたすら歩きまわった話。どの写真にもひとつのストーリーがあり、えっ?と思うようなお話しもでてまいります。能古島の春、夏、秋、冬も一度に御覧いただけます。この写真は11月末日迄、当館に展示致しております。今回おしくも入選されなかった写真ももちろん展示致しております。どうぞ御来館下さい。そしてまた来年もぜひたくさんの御応募をお待ち致しております。有難うございました。

第三回能古の風フォトコンクール賞

グランプリ賞

| | | | |
|----|---------|--------|-------|
| 1点 | 50,000円 | 粕屋郡宇美町 | 渡邊 健様 |
|----|---------|--------|-------|

準グランプリ賞

| | | | |
|----|---------|-------|-------|
| 1点 | 30,000円 | 福岡市西区 | 野村 武様 |
|----|---------|-------|-------|

特別賞

| | | | |
|----|---------|-------|-------|
| 1点 | 20,000円 | 福岡市南区 | 小川 誠様 |
|----|---------|-------|-------|

入選

| | | | |
|----|---------|--------|---------|
| 1点 | 10,000円 | 福岡市南区 | 佐藤八重子様 |
| 1点 | 10,000円 | 福岡市早良区 | 斎田 英二様 |
| 1点 | 10,000円 | 前原市篠原 | 篠原 照幸様 |
| 1点 | 10,000円 | 福岡市中央区 | 藤吉マツエ様 |
| 1点 | 10,000円 | 福岡市早良区 | 安河内栄美子様 |
| 1点 | 10,000円 | 福岡市西区 | 柳瀬 尚子様 |
| 1点 | 10,000円 | 福岡市中央区 | 山本 光玄様 |

能古博物館協賛会・友の会

〔法人協賛会員〕

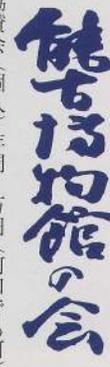
- 医療法人原土井病院 原寛
ワタキユーセイモア(株)
福岡メデイカルリース
(株)アールアンドエム
(株)クリエティタラクス
福岡核坂郵便局 鬼坂信孝
福岡総合郵便局 西万俊信
福岡赤坂郵便局 戸田正義
日清医療食品(株) 福岡支店
(株)福岡経営管理センター
(株)サンコー
医療法人 恵光会原病院
(株)西日本銀行 和臼支店
(株)西日本銀行 千代町支店
(株)西日本銀行 香椎支店
(株)西日本銀行 土井支店
(株)西日本銀行 新宮支店
(株)西日本銀行 箱崎支店
(株)西日本銀行 久山支店
(有)サンネット
(株)福砂屋
(株)昭和鉄工
商業コンサルタント
井本医科器械(株)
(株)九電工 福岡東営業
(有)高電社
(有)タカミ工業
(株)福来電設
(株)電通技研
出口塗装
笠松会有吉病院
日本スラット(株)

〔協賛会会員〕

- 松本盛二③ 中山重夫⑥ 早船正夫⑩
南誠次郎⑩ 菅直登⑧ 浄満寺⑩

〔友の会会員〕

- 奥村宏直⑦ 笠井德三⑦ 荒木靖邦⑧ 冲双葉⑧ 安路光正⑤ 亀井准輔⑩ 熊谷雅子⑥ 石橋観一⑩ 木原敬吉④ 坂田文治④ 庄野直彦④ 原田英雄⑦ 森光英⑦ 永井功⑤ 緒方益男⑦ 浦上健⑥ 山本稔③ 山中貞輝① 武内隆恭② 白水義晴⑦ 石野智恵子⑩ 翠川文子⑥ 熊谷豪三① 吉原湖水⑨ 有江勉① 山崎拓① 上田満③ 江崎直直⑦ 小田一郎③ 七熊太郎⑥ 西喜代松⑦ 梅田光治⑤ 片桐寛子⑦ 具島菊乃⑤ 瀧栄三郎③ 永田蘇子⑥ 西村俊隆⑥ 明石散人①
立石武泰⑪ 伊藤茂⑩ 玉置貞正⑩ 水戸龍一⑩ 岡部六弥⑩ 吉野万里⑧ 星野雪江⑧ 安松勇一⑩ 上田良一⑦ 高田浩二⑨ 桑野次男⑨ 藤六充子⑨ 和田宏子⑨ 板中継生⑦ 行成静子⑩ 鬼塚義弘⑨ 片岡洋一⑩ 石川文之⑧ 橋本敏夫⑧ 都筑久馬⑧ 斎藤拓⑧ 横山智一⑧ 宮崎清⑦ 西政憲⑦ 岡本金蔵⑦ 三宅碧子⑩ 林野金子⑩ 星十九楼⑦ 宮徹男⑩ 安永友儀⑩ 織田喜代治⑥ 上田博⑦ 鶴田スミ子⑦ 塚本美和子⑥ 伊藤康彦⑤ 寺岡秀実④ 奥田種美④ 石橋清助⑨
井上敏枝⑤ 隈川清次⑦ 吉富とき代⑤ 大山宇一⑥ 葉山政志⑤ 川島貞雄⑦ 岸洋子⑧ 柳山美多恵⑦ 久芳正隆⑦ 半田耕典⑥ 武藤瑞也④ 莊山雅敏④ 吉田洋一⑤ 永岡喜代太⑥ 神戸純子④ 渡辺美津子⑤ 山田博子⑤ 佐藤泰弘⑥ 前田静子④ 飯田晃⑤ 吉岡克江③ 神戸聡③ 林野祥子③ 田里朝男③ 吉田一郎③ 池田修三⑤ 黒田喜美子③ 岩谷正子③ 山本達也⑩ 甲本達也⑩ 鋤田祥子④ 守瀬孝二① 庄野陽一⑦ 豊島嘉穂② 市丸喜一⑥ 古山正昭⑥ 西野元昭⑥ 吉瀬宗雄⑩ 大久保昇③ 党隆雄③ 福澤昌弘② 小嶋孝行③ 福本幸行③ 樋口陽一② 片桐淳二⑦ 桑下勤⑨ 桑形シズエ⑧ 酒井カツヨ⑧ 佐々木謙⑧ 島義博③ 中上紀子③ 田中孝信⑧ 西島道子⑧ 西嶋洋子⑧ 村上靖朝⑧ 森本憲治⑤ 木原光男⑤ 庄野健次⑦
田代直輝⑩ 西村達頭⑧ 執行敏彦④ 渡辺千代子⑦ 後藤和子⑦ 脇山浦一郎⑩ 川浪由紀子⑧ 川田啓治④ 足達輔治④ 中村ひろえ⑨ 古賀謙二⑦ 野尻敬子④ 大野幸治④ 櫛田正己⑨ 青木良之助⑨ 神崎憲五郎⑦ 金子柳水④ 佐野太④ 井手至⑩ 宮崎春夫⑩ 鬼丸碧山⑦ 黒川邦彦⑦ 山崎元治④ 小山西治④ 杉原正久② 原祐一② 杉みどり② 原康二① 小堀百合子① 原礼子① 土屋重儀② 白井重儀② 櫛島政信③ 近藤雄文② 武田初代子② 岸本雄二② 岩淵謙治⑥ 徳重認① 石橋善弘③ 吉村陽子⑦ 富永紗智子① 田中加代④ 鈴木惠津子⑥
野崎逸郎⑤ 住本霞② 山根ちず子⑩ 村山直之② 住本吉之④ 大島節子④ 間所ひさ子⑨ 鹿毛英邦① 伊藤光生① 古賀光子① 林正孝② 井上雷策② 田中寛治② 土屋重儀② 白井重儀② 原礼子① 小堀百合子① 原康二① 杉みどり② 杉原正久② 山下清久② 益尾天嶽⑥ 野上哲子① 富田英寿⑥ 山崎剛一① 小山正博① 石橋正治① 藤野忠行① 藤野忠行① 松尾清美① 蓮尾正博① 森祐行① 村上蓉子① 吉安修一① 小谷修一① 阿部昌弘① 結城順進① 永石史郎① 重松史郎① 藤吉マツエ① 岸井勝夫① 山本光玄①



※新規の御加入(先号以後、平成十二年十月三十日現在)を、記載いたしてありますので、何卒ご芳名をご確認ください。
友の会 年間3千円(何口でも可)
館の活動、館誌購読と催事企画に参加
自然と文化の小天地創造

協賛会(個人)年間1万円(何口でも可)
(法人)年間3万円(何口でも可)
館維持、資料収集、施設整備等の資
金援助を受ける
納入方法 郵便振替 0173019160970
財団法人 能古博物館

右の会費受領は、その都度本誌に掲載、以後会費相当期間を名簿にします。
※メールアドレスをお持ちの方はお手数ですが当館のメールアドレス迄、お知らせ下さい。

能古博物館ご案内

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)
休館日 12月1日~2月末日の冬季のみ休館
入館料 大人400円・中高生200円
交通 浜渡 能古行渡船場→フェリー(10分)
→能古(徒歩5分)→博物館
〒819-0012 福岡市西区能古522-2
(092) 883-2887
FAX(092) 883-2881
ホームページ http://www.try-net.or.jp/~noko
メールアドレス noko@try-net.or.jp